

nication

「繋がる」を考える

— 帰属意識を高めるインナーコミュニケーション —

大学は高等教育機関として社会的存在であると同時に、学生・教職員・保護者・卒業生をはじめとする多くのステークホルダーによって構成される組織である。

日頃、学内で関わり合いながら教育研究活動を行っているが、そのさまざまな立場の構成員がゆえに大学組織としての共同意識や一体感を形成していくのが難しい。大学への愛校心の醸成や帰属意識を高めるためにはどうすればいいか。構成員の関係を深めながら、組織活性化やモチベーション

CONTENTS

創立120周年記念事業で繋がる縁が
大学の未来を創る

瀧口 深雪

東京経済大学総合企画部広報課長

「第二の青春」

「ほとばしる母校愛」

— 早稲田大学校友会の「繋がる」取り組み紹介 —

三木 省吾

早稲田大学総長室副室長(社会連携担当)

校友課長・校友会事務局長

Internal Commu



を向上させるインナーコミュニケーションを積極的に実践している大学の事例を取り上げ紹介していく。本企画では、昨今のコロナ禍の影響により、大学内での対面機会が失われている実情もふまえながら、オンラインでの交流が一般化した現代において、人が「繋がる」ことの重要性を改めて考え、これからの新たな可能性を考える機会としたい。

技術に堪能なる士君子を育てる

—九州工業大学卒業生の強い母校愛と同窓の絆—

永松 正博

九州工業大学名誉教授

明専会常務理事

教育後援会 presents

コロナ禍を超越する「繋がる」事業

—「大学と家庭の心のかげ橋」の実践—

宮田 慎一

関西大学教育後援会副幹事長

学校法人関西大学総務局付次長

「食支援」が紡ぎ出すコミュニケーション

—大学構成員の意識変化と社会との連携創出—

龍谷大学学生支援特別推進室

深尾 昌峰・岡田 雄介

杉山 聖子・西坂 正雄

大学と「つながる」・人と「つながる」

—TWCUSプロジェクト

学生の活躍で活気あるキャンパスを目指す—

安藤 由紀美

学校法人東京女子大学事務局長

創立120周年記念事業で 繋がる縁が 大学の未来を創る

瀧口 深雪

東京経済大学総合企画部広報課長

はじめに

新型コロナウイルスが世界中を席卷するなか、東京経済大学は、2020年10月23日に創立120周年を迎えた。本学は明治・大正期の経済人である大倉喜八郎が、前身校である大倉商業学校を1900年に創立したことに端を発する。

学生、教職員をはじめ卒業生や保証人、地域の方々など東京経済大学に関係する皆が、本学の歩んできた120年を共に振り返り祝い、そして次のステップに一緒に向かう、

そのような120年の節目を迎えられるよう2015年に創立120周年記念事業企画委員会を立ち上げ、学生、教職員、卒業生などから広く120周年を記念する事業を募集した。

創立120周年記念事業には、教育研究に関わることから環境整備までさまざまな応募があり、「教育研究の充実」「施設・設備の充実」「学生のチャレンジを支援する各種奨学金制度の創設」「記念出版展示」「記念事業・行事」「記念式典」の6項目14件の事業が計画されていたが、新型コロナウイルス感染症拡大により当初の予定通り運ばないことも数多くあった。

大学の伝統と中規模大学であることのメリット、そして「進一層」(困難に出合ってもひるまずに、なお一層前に進む、の意)と「責任と信用」という建学の精神を生かしつつ、これからの社会を創造する有為の人材を育成するとともに教育研究体制の改革と施設の充実を目指して記念事業を展開した。

教育研究の充実は「アカデミズムに裏打ちされた実学教育」を基本コンセプトに、「教育の東経大」「実学の東経大」「ゼミする東経大」「就職の東経大」「伝統の東経大」の5つのキータムを掲げ、これに沿った教学改革を推進した。

前述の本学の教育コンセプトを伝えるために在学生や受験生など向けには、より興味を持ってもらえるようコミュニケーションワード「考え抜く実学。」を設け、大学案内や大学ロゴと併用したコピーとして展開し定着させた。東京経済大学で学ぶ意義として、人間力の土台となる幅広い教養が得られることや、個々の専門を深く学び師と友と切磋琢磨し考え抜く環境があることなどがあげられるが、どんな時代になろうとも自らの判断で人生の舵をとり、豊かな一生を築くための基礎を作る重要な4年間がここにある、という大学の姿を、「考え抜く実学。」から伝えられたのではないかと考える。

また、120周年を機とした新構想を検討するために、2019年度には学長の諮問機関として職位、立場も違うさまざまな教職員が参画した新構想策定委員会が立ち上げられ、1年をかけて情報を整理し、検討を重ね10年後を見据えたこれからの本学の構想に関する答申が出された。

現在、新構想具現化検討委員会の下、同委員会の答申に基づき作業部会を設置し、データサイエンス教育などそれぞれの課題に関してアクションプランを作成し、2021年度以降全学をあげて一層改革を進めていく予定である。

1 周年に向けた意識醸成 特設ページの開設と記念ロゴの策定

2017年の創立120周年記念実施委員会の設置をきっかけに、大学に関係する全ての人が同じ気持ちで2020年の創立120周年を迎えるにあたり、大学Webサイト内に創立120周年記念の特設ページを開設し、記念ロゴを制定した。

特設ページは、チャレンジし続ける大学をコンセプトに制作され、理事長、学長の挨拶にはじまり、大学カラーの逸話やロゴマークの説明、そして創立120周年を写真で振り返る写真館などが設けられ、本学が120周年を迎えることを在学生、教職員、卒業生などに改めて認識してもらうことを意識したつくりとなっている。

その中でも「学生たちのチャレンジする力」はじめて物語」は、先に述べた本学の建学の精神「進一層」を体現し、大入学後新たなことにチャレンジする学生たちを4年間追い続け、その成長していく姿を描く企画として設置した。大学の一方的な情報発信ではなく、企画に学生たちが登場することで、在学生は一緒に仲間の成長を見守りつつ自分の成

長を重ね、卒業生は在学生たちの奮闘する姿を通じて大学を応援する気持ちに愛校心を醸成するためのコンテンツとして有効に働いたと考えている。

残念ながら新型コロナウイルス感染症のため取材を途中で断念せざるを得なかったものもあり、4年間を通じて成長を追うことができなかったことは悔やまれる部分もあるが、この2020年という年を大きく反映させた大学の貴重な記録となるのではないかと考えている。

2 学生の意欲にこたえる 新たな2つの奨学金制度の創設

創立120周年を機に、学生の大学生活をより充実させるために2つの奨学金を創設した。

1つ目は、海外留学をする学生の現地での生活費を補助する「120周年記念留学支援折元奨学金」である。

稀代の商人として明治・大正時代に名を馳せた大倉喜八郎は、日本で初めてロンドンに大倉組商会の支店を開設するなど海外貿易にも積極的にかかわった人物であり、世界で活躍できる経済人を育成することを目的に本学の前身で

ある大倉商業学校を設立した。その大倉喜八郎の心意気を汲む卒業生から、留学先での生活費補助を目的としてご寄付をいただいたことがきっかけで、本奨学金が創設された。大学の留学制度を活用し海外の協定校で勉学に勤しみ、見聞を広げるためのさまざまな活動に積極的に取り組んでもらうための奨学金である。

本奨学金を活用した1人目の学生は、2019年8月からペース大学（米国ニューヨーク）へ留学したが、その後は新型コロナウイルスの影響で送り出すことができず、2人目は2021年9月を予定している。

2つ目は、「120周年記念スポーツ・文化振興基金」である。本学はこれまで、特定の部活動などに対し大々的に寄付を募っていなかったが、学生が課外活動を通じて得られる教育的効果は図り知れず、さらに積極的にチャレンジする環境を整えるため、大学公認の体育会・文化会サークルを指定して寄付を受け付ける制度を確立した。卒業生をはじめ保証人などからも各団体へ多くの寄付があり、在学生、卒業生が一体となり活動がますます活発化され、大学を活気づけると同時に、愛校心も強まったのではないかと思われる。

3 「縁結び」がコンセプト 人々が憩う場の創設

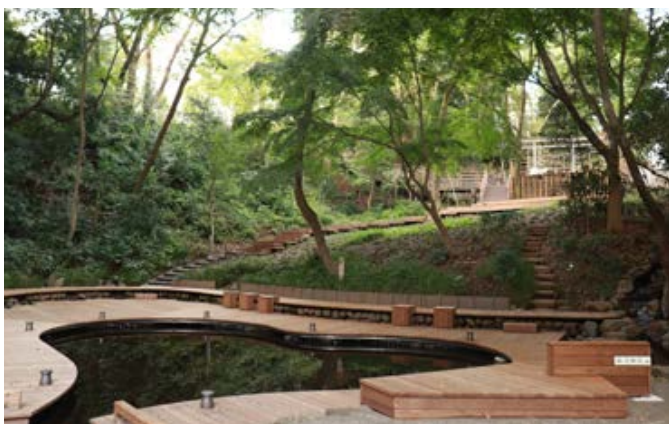
今後、学生のための厚生施設や教室棟、研究棟の整備が予定されているが、それに先立ち本学敷地内に有する新次郎池周辺整備事業が2020年10月末に完了した。

本学敷地内南側には国分寺崖線が東西に走っており、崖線に沿って東京の名湧水57選にも選ばれる新次郎池が所在している。新次郎池は、もともと山葵田^{わさび}として利用されていたものを本学第4代学長の北澤新次郎の時代に整備し、その名を冠し森の中

心として長年親しまれている。120周年記念事業

以前より武蔵野の森を残すため、外来植物の伐採を行うなど、エコキャンパス委員の教職員を中心に学生や地域の方と共に定期的に手入れを行っていた。

これまで以上に学生や



新次郎池

地域の方々に愛される場所に生まれ変わるべく、「縁結び」をコンセプトに、120周年記念事業の一つとして新次郎池一帯の雑木林を「東経の森」と名付け、周辺の整備を行った。

新次郎池の周りは、本学の校章にも使用されているフタバアイをモチーフとしたウッドデッキが配置され、崖線の上には池を見渡すパーゴラ(つる棚)が設置された。池の周りを散策するための小道は「森の回廊」と名付けられ、元の形状を残しつつ足元灯や手すりなどを設置し、学生はもとより本学を訪れる方々にも安心して過ごして頂ける場所となった。また、池のほとりには卒業生より寄贈されたフタバアイも移植され、大学のシンボルとなる新たなスポットが完成した。

授業の合間に散策しながら一息つく学生の姿も見られ、また、少人数のゼミなどで青空講義を行うことができるパーゴラを既に活用したゼミもあり、新次郎池を中心とする「東経の森」は、学生と大学、卒業生と大学、地域と大学といったさまざまな人と人との交流を生み出し、新たな縁を結ぶ重要なスポットになっていくことを考えている(残念ながら2021年3月現在、新型コロナウイルス感染症予防対策の一環として一般への公開は見送っている)。

4 過去から現在、そして未来へ続く記念展示会の開催

本学の前身大倉商業学校は、創立から第二次世界大戦で校舎を焼失し現在の東京都国分寺市に移転するまでの間、The Okura Tokyo(旧ホテルオークラ東京、東京都港区虎ノ門)に隣接する地に所在していた。創立120周年の記念展示は、2020年10月3日から25日にかけて創立の地にごく近い「大倉集古館」で開催され、創立から現在までの本学や創立者に関する歴史的資料の展示を行った。

大倉喜八郎が、大倉財閥として多くの関連事業を起こしたことを物語る経済人としてのゆかりの品々ばかりでなく、文化愛好家としての品々も展示され人間としての喜八郎を偲ぶ展示を行った。また、記憶と記録でつづる120年として大倉商業学校から東京経済大学への軌跡をたどる大学の歴史を語るに外すことのできない資料も数多く展示された。

この展示会には、多くの卒業生や大学関係者が訪れたのは言うまでもなく、創立者を同じくする多くの企業関係者にもご来場いただき、20日間の会期中2000名近くが来館した。

また同展示会では、歴史的資料の展示に留まらず、大学が掲げるコンセプト「考え抜く実学。」をテーマにしたデジタ

ルインスタレーション展示や創立者をバーチャル出現させるなど、現在本学が取り組む新たな試みも披露した。歴史的資料だけでなく現代技術を駆使した展示も取り入れることで、デジタルネイティブ世代の在学生たちも楽しむことができるように工夫し、ここでも共に120周年を祝う気持ちを醸成する取り組みを行った。

5 「考え抜く実学。」から始まる121年目の東経大

「帰属意識」や「愛校心」を高めるためだけに在学生や卒業生に対し広報を行うわけではないが、一つの目的に向かって皆で進む際に広報・広告は重要な要素であると考える。創立120周年においてさまざまな事業を展開すると同時に、広報手段を用いて多くの方に本学の創立120周年が届くように年間を通じて広報を展開した。

2019年12月の大学Webサイトのフルリニューアルにはじまり、2020年1月には、全国紙に大学コンセプトである「考え抜く実学。」を言語化した広告を掲載し、同時に首都圏の約30駅でB全版を2連貼りする広告を展開した。併せて、大学Webサイト内では、教員による「考え抜く実学。」の

Internal Commu

コンセプトを反映した対談を掲載し、新聞、駅貼り広告、J-R中央線窓上広告、大学Webサイトを連動させそれぞれの相乗効果を狙った。その後も、本学の卒業式である3月23日には、大学で卒業式を迎えることのできなかつた卒業生に向け新聞紙上を通じてお祝いの気持ちを届けつつ、急遽開催することとなった卒業式のライブ配信を告知するなど、120年目の特別な年を特別な形で届けた。時流を反映させた広告として新聞協会のWebサイトや刊行物、広告業界雑誌などでも取り上げられ、副次的にさまざまな人の目に触れることとなり、我々が想像した以上の反響をもたらした。

そして創立記念日である10月23日には創立の地に隣接するThe Okura Tokyoで120周年の喜びを分かち合う予定であったが、コロナ禍の中、責任と信用を建学の精神とする本学が式典などを行うのは好ましくないと判断、記念式典を中止し、代わりに新聞紙上で121年目に向けた本学の決意を表明し、学生、教職員、卒業生、保証人などの関係者だけで



2020年卒業式広告

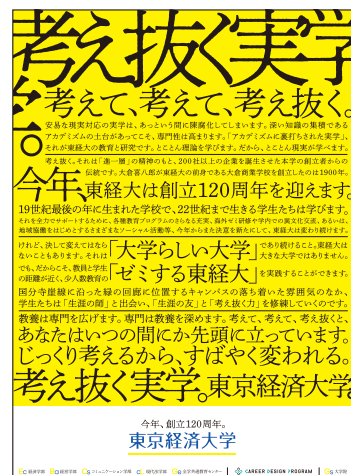
なく広く社会一般に東京経済大学らしさを伝えた。

本学では広報活動をしさを伝えるブラン

ディングを重視した、「コミュニケーション・デザイン」として考え、情報の発信を行っている。創立120周年記念事業においても「考え抜く実学。」というコンセプトを基軸に、「大学らしい大学」であり続けようとする東京経済大学そのものの価値を理解し、学生がいかに自学に関心を寄せるか、卒業生が母校をどれだけ応援したいと感じるか、一般の方々が見守る存在や取り組みに対しどれだけ興味を持つかなど、大学と人との繋がりを意識して展開した。

創立120周年の取り組みはここに記載した以外にも、学術シンポジウムの開催や年史の編纂などが行われた。そのいずれも過去から現在、未来へと続く本学の歴史が関係する人々の心を繋げ、これからも共に本学を形作っていくための貴重なものであったと考える。

121年目の東京経済大学にご期待ください。



2020年1月大学コンセプト広告

「第二の青春」

「ほとばしる母校愛」

― 早稲田大学校友会の
「繋がる」取り組み紹介 ―

三木省吾

早稲田大学総長室副室長(社会連携担当)
校友課長・校友会事務局長

はじめに

昨年2020年は、新型コロナウイルス感染症が日本国内のみならず、世界的な感染流行となり、人々の生活に深刻な影響を与えた。そして1年以上が経過した現在も油断のできない状況が続いている。早稲田大学においても、教職員が一体となって、教育・研究活動を懸命に前進させるとともに、経済的に困窮する学生を救済すべく「新型コロナウイルス感染症拡大に伴う緊急支援金」を創設し、一人10万円の支援金を5千人以上の学生に給付するなど

さまざまな対策を講じてきた。こうした未曾有の危機に際して、本学を温かく励まし、物心ともに強力な応援団となっているのが、本学の校友(卒業生)であり、その校友組織(同窓会組織)である早稲田大学校友会である。校友会は、早稲田愛に満ちた校友たちによる『母校愛の坩堝』^{るっぼ}であり『第二の青春の舞台』である。

以降からは、早稲田大学校友会による、愛校心・帰属意識醸成に繋がる代表的な取り組みや新たな活動などを紹介するとともに、今回のコロナ禍での母校支援の様子などについても触れてまいりたい。

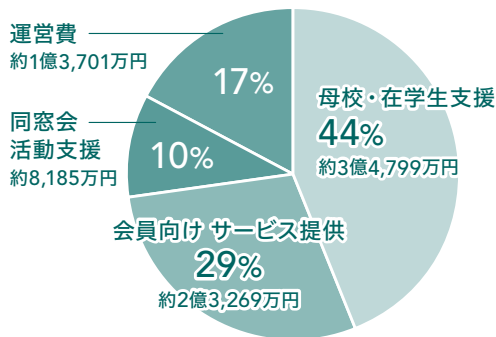
1 早稲田大学校友会の概要について ― 校友と大学関係者との緊密な関係構築 ―

本学の同窓会組織である早稲田大学校友会は、早稲田大学の前身である東京専門学校(第1回卒業生が出た翌年1885年(明治18年))に発足し、昨年2020年に設立135周年を迎えた。校友会の会長には早稲田大学総長が就任し、全ての卒業生が校友会の会員となる。物故者を除く現在の会員数は約65万人(2020年度)。年

間一人5千円の会費をもとに、母校支援・社会貢献を実現するとともに、会員の親睦のための各種イベントなど年間を通じて実施している。

奨学金を主とした母校支援(大学への寄付)は、現在は毎年2億5千万円から3億5千万円程度で、校友会費使途の約4割が母校・在学生支援となつているが、奨学金のほかにも多種多様な母校支援を行っている。例えば、大学の正規科目として「校友会支援講座」を設置し、校友が授業内容の企画や講師として学生の教育に携わる取り組みや、各キャンパスの学生食堂で実施する「100円朝食」を予算的に支え、学生の健康的な食生活に貢献するなど、大変ユニークな支援も行っている。

一方で、会員の親睦のための活動も多岐にわたっている。校友会には、約400の地域稲門会、約80の海外稲門会、300以上の職域稲門会、約290の年次稲門会など、1380以上の団体(稲門会)が登録され、各々が活発な



[図] 2018年度校友会費の使途

活動を行っている。ここ数年、各種メディアなどで取り上げられた新しい稲門会としては、医学部を持たない本学出身の医療従事者によって構成されている「稲門医師会」(会員数約300人)や、同様に神道系学部を持たない本学出身の神職によって構成されている「神道稲門会」(会員数約70人)などがある。多様な分野で本学の校友が活躍・貢献していることが、早稲田らしさの証として話題となった。

なお、各都道府県を代表する48支部をはじめとする各支部・稲門会の総会には、大学からも総長および役員・管理職などが毎年出張し、大学の近況を紹介するとともに、日頃の感謝やさらなる支援・応援をお願いするなどしている。総会の後には懇親会・二次会・三次会(地域によっては四次会・五次会・締めめのラーメンも)と続き、多くの校友と総長をはじめとした大学関係者が大いに飲み、大いに語らい、記念写真を撮り、肩を組んで歌う、早稲田一色の楽しい宴が全国各地で繰り広げられている。これは校友会活動のほんの一例であるが、校友と大学関係者とは日頃からさまざまな支部・稲門会のイベント等で緊密な関係構築を継続的に行ってきた。

2 校友会の最大イベント「稲門祭」について ―『もう一度青春に帰る入口』―

そして、なんとと言っても、校友会最大の親睦イベントはホームカミングデーと同日に開催する「稲門祭」である。学生の祭典が「早稲田祭」であるなら、校友の祭典は稲門祭である。稲門祭は毎年約1万5千人の来場者があり、卒業年に関係なく誰でも参加可能なイベントである。著名校友による企画や音楽イベント、そして100を超える団体が模擬店を出店し、地域の銘品や定番グルメなどを販売している。さらに「稲門祭記念品」として毎年オリジ



2020年度「稲門祭」のポスター。
今年はコロナ禍を克服して開催したい

ナルのグッズも製作され、その収益金は現役学生の奨学金として大学に寄付されている(毎年1千万円程度)。稲門祭には、多くの校友がボランティアで運営委員として参加しており、自身の仕事を終えた後(午後7時頃から)に大学に駆けつけて準備を行う。この準備期間は1年間にわたって行われる。役割によっては相当ハードな場合もあるが、稲門祭当日が近づくにつれ、携わる校友の表情は生き生きと輝いてくる。稲門祭とはまさしく、『もう一度青春に帰る入口』なのである。

また、稲門祭には全国の学生稲門会(出身地域ごとの学生サークル)のメンバーや校友会からの支援を受けた奨学生、早稲田祭運営スタッフ、環境ロドリゲス(環境問題に取り組み学生サークルで稲門祭ではゴミの回収・分別を担当)などの多くの現役学生が校友と協力し合いながら運営に参加協力してくれている。この校友と学生との協働は、校友にとっては『第二の青春』『20歳の自分との再会』であり、校友の母校・学生支援のモチベーションは一層高くなる。一方、学生にとっては卒業生との貴重な出会いにより、就職の相談や卒業後の自身の姿をイメージできる絶好の機会となっている。実際に、稲門祭に参加協力した

学生には卒業後に校友会活動の若手コアメンバーになっている者も少なくない。こうした点から、近年では稲門祭だけでなく他の多くの校友会関係イベント等にも学生が招待されて参加するようになってきている。若い学生たちの参加によって会の雰囲気も華やかになり、年齢に関係なく一緒に楽しく盛り上がり、学生には校友会を意識してもらい、卒業後には校友会活動へ積極的に参加してもらえよう、その循環を構築すべく、校友たちも知恵を絞りながら活性化に努めている。校友会としては、校友と大学関係者との関係構築支援を行うとともに、稲門祭をはじめとする各種イベントなどを軸にして、校友と学生との交流促進による組織強化についても働きかけを行っている。

3 校友と学生との協働による新しい校友会活動について — 母校の後輩学生のために汗を流す校友たち —

稲門祭以外でも、ここ数年、校友と学生との新たな交流イベントや学生向け企画が生まれている。これらは単なる就職関係イベントとは一線を画している。例えば、①学生時代の学びや、現在の仕事をはじめとした生き様などを校友から

紹介してもらい、学生からの率直な質問や悩みに対して先輩として本音で語ってもらう「先輩と語ろう!」。②地方に生が外向き、当該地域在住の校友の仕事体験し、地方校友の自宅に宿泊などをしながら、なぜ地方での生活を選んだのか、なぜUターン・Iターン就職をしたのか、そして東京(早稲田)での学生生活を生かしてどのように地域で活躍しているのか等を学んでもらう「先輩に会いに行こう!」。さらに、③約100人の学生を引率して地方に出張。地元の校友の支援により、その土地のアーケード街やコンサートホールで中高生や一般向けに演奏会を開催。演奏会終了後には舞台で演奏していた学生が中高生向けに受験勉強のアドバイスや東京での生活を語るなど大いに来場者と交流することにより新たな早稲田ファン獲得を目指すイベント「早稲田大学演奏旅行」。



「早稲田大学演奏旅行」アーケード街でのデモ演奏

nication

こうしたイベントは校友と学生との交流・協働により、満足度の高い充実した内容になるとともに、参加学生の卒業後をも見据えた（若手校友の中心的存在になることを期待した）取り組みである。校友には多くの寄付と沢山の汗をかいていただいているが、母校の後輩学生のためとなれば、早稲田の校友は力の限りの協力を惜しまない。

これらの紹介した取り組みは、校友会活動のごく一部に過ぎない。例年は世界各地・全国津々浦々で年間を通じてこうしたイベントなどを展開することにより、校友会組織として、熱烈な早稲田愛や早稲田への帰属意識を繰り返し醸成している。言い換えれば、早稲田一色の祭りが毎年熱く楽しく行われている。

それだけに、昨年2020年からのコロナ禍が校友会活動に及ぼした影響は大きく、イベント中止など残念なこと



校友と現役学生と一緒に楽しく盛り上がる

も多かった。ただ、そうした中でも、校友には前向きに母校のためにご尽力をいただいた。以降は、大学の危機的な状況に対する校友および校友会の取り組みについて記したい。

4 「コロナ禍における校友からの支援について（その1）」 「緊急支援金」への強力なバックアップ

今振り返ると、2020年は早稲田大学校友会にとって明るい幕開けであった。なんと言っても早稲田スポーツの躍進である。競走部が新年早々の箱根駅伝においてシード権を奪取でき、さらにラグビー蹴球部が全国大学ラグビーフットボール選手権大会の決勝戦で11年ぶり16回目の大学日本一に輝くなど大変幸先の良いスタートであったことから、校友を含めた早稲田関係者は大いに盛り上がり、同年の夏に予定されていた東京オリンピックピック・パラリンピックでも早稲田の選手たち（現役学生・校友）の活躍を期待し楽しみにしていた。こうした明るい新年の幕開けが一転、未曾有の事態となってしまうのだが、このような逆境下において、日頃から醸成されてきた校友の、早稲田愛が大学にとって大きな支えとなった。

Internal Commu

4月下旬、田中総長から校友会事務局を通じて、「新型コロナウイルス感染症拡大に伴う緊急支援金」（一人10万円）の支給への協力依頼が校友に対して発信された。コロナ禍の影響により、在学生のご父母など家計支持者の収入激減および学生本人のアルバイト収入の激減といった状況を受け、「経済的な理由で、学業をあきらめる学生を一人も出したくない」という大学の思いをなんとか実現するための切実な依頼であったが、総長からのこの依頼を受け止めた校友の動きは大変早かった。4月下旬の依頼開始から約1か月（6月初旬）で2億円、2か月以内（6月中旬）で3億円、約3か月（8月初旬）で5億円、そして年内12月初旬には8億円以上の寄付が集まった。件数にすると約1万7千件に上る。特に今回は20代の若手校友から80代以降のご年配の校友まで年代に関係なく幅広くご支援いただいたことが有難かった。多くの校友が自身で寄付する以外に、同じ地域・同じ卒業年次・同じゼミ・同じサークルなど校友同士で声を掛け合ってくれたことも大きかった。また、協力してくれた校友は国内のみならず海外にも及んだ。例えば、台湾校友会からは1千万円のまとまった寄付があり、ニューヨーク稲門会はオンラインイベントの参加費をす

べて緊急支援金に寄付していただいた。他にも、中国留学生稲門会からマスク1万枚を現物寄付いただくなど、国内外から数えきれないほどの温かい応援が寄せられた。

さらに、例年は各種イベントなどの親睦活動の補助費として配分している校友会予算についても、「母校や後輩学生が厳しい状況に置かれている。今年の予算はできるだけ多くを学生救済への寄付にまわそう」という校友からの温かい声をいただき、校友会本体からも早々に数千万円の支援を行うことができた。今回、とても沢山の校友から、とても大きな金額の支援をいただいたわけだが、大学としては、件数や金額も勿論であるが、なにより早稲田愛に満ちたお一人お一人の温かいお気持ちが大変嬉しく、これはまさに日頃からの継続的な校友会活動と緊密な関係構築の賜物であると実感した次第であった。

5 コロナ禍における校友からの支援について(その2) — 親睦活動と支援の両立によるバックアップ —

校友による支援については、前述した緊急支援金への直接寄付以外にも多岐にわたって行われた。以降は、その

一例を紹介したい。

東京都23区支部では、例年通りの活動ができない中で「母校支援に繋がる新しい試みができないか？」と検討し、4月早々にオリジナルの早稲田マスクを製作。2つのマスクをセットにし、500セットを製造したところ、あっという間に完売となり、収益金は緊急支援金に寄付された。このマスク製作は単なる母校支援ではなく、製作や販売の過程に多くの校友が携わり、それが新たな親睦活動・校友間のネットワーク構築にも繋がったことから、その後、他の稲門会でも同様の取り組みが行われることとなった。

また、母校支援とは別に、早稲田の街の活性化に取り組んだ校友のプロジェクトも生まれた。新型コロナウイルスの脅威は、早稲田の街（大学周辺商店街）にも大きな影響を及ぼした。授業のオンライン化による客足の減少に対して、校友が主導したプロジェクト「わせまちマルシェ」が



売上は学生支援に寄付された

立ち上がった。この「わせまちマルシェ」は、大学周辺商店街の食事券や商品などを購入できるオンラインショップで、今回は約20の店舗が協力し、50以上のサービスが提供された。当該プロジェクトは20代の若手校友が主となり、SNSや雑誌・テレビなどにも取り上げられたため、全国の多くの校友が賛同し、学生時代に通った懐かしいお店の窮状を救うべく支援を行った。その結果、開始3カ月（8月末）で約650件の申込みと約500万円の寄付を集めることができた。校友会としても、大学周辺の商店街とは日頃から協力関係にあり、「稲門祭」をはじめとするイベントや地域のお祭りなどさまざまな行事と一緒に早稲田を盛り上げている大切な存在であることから、校友向けのメールやSNSなどを通じて当該プロジェクトを大いに支援した。プロジェクトは、今は一旦区切りとなったが、今後も継続的に商店街を応援し、ともにこの難局を乗り越えたいと考えている。

最後に、「早稲田学報」の取り組みについても紹介したい。「早稲田学報」とは校友会が隔月で発行しているコミュニケーション誌で、年間5千円の校友会費を納入いただいた校友にお届けしている。幅広い分野で活躍する校

友や、大学および校友会の近況を紹介しており、発行部数は約17万部。書籍(紙)離れが進む現在では大変貴重なツールである。今回のコロナ禍で、ステイホームが叫ばれる中、この紙媒体の「早稲田学報」の存在感はとて大きく、校友にとつての楽しみとなっている。コロナ禍により、実際に集まつての校友会活動が難しい中、校友会としては校友の皆様にも少しでも明るく楽しく元気を与えたいと、「早稲田学報」を使った新規企画や特集も行った。例えば、著名校友27人から、校友へのメッセージをいただき掲載したり、国内外におけるコロナ禍での活動や過ごし方について紹介し合ったり、自宅で過ごすことによるストレスを発散してもらおうと、校友の落語家やお笑い芸人、歌舞伎俳優、講師などの方々にも協力いただき、「笑い」の特集号の発行を行うなどの工夫を行った。そして、今回は中止となつてしまつた「稲門祭」について『稲門祭への思い』と称した特集を組み、メッセージを募つたところ、全国の校友から沢山の熱い



隔月発行の「早稲田学報」

思いが届き、表紙を含めて早稲田愛で誌面が満ち、多くの校友に喜んでいただけた。Zoom懇親会など、オンラインでの校友会活動を積極的に行っている校友も多いが、それと同時に、この紙媒体の「早稲田学報」は依然として年齢層に関係なく全ての校友に楽しみにしていただいている。校友会としては、コロナ禍においても継続的に発行できている「早稲田学報」を重要な校友会活動(校友とのコミュニケーションツール)の一つとして、引き続き大事に育てていきたいと考えている。

前述の取り組みは、コロナ禍での校友会活動の一例に過ぎないが、こうした熱い校友たちの思いを大切にしながら、校友会活動の今後の課題と展望を以降に記したい。

6 校友会としての今後の課題 — 熱い早稲田愛を益々発展させるために —

2020年度の校友会活動は、校友の命と健康を第一に考えて対面での親睦活動を極力控えるとともに、その分、コロナ禍で苦しむ母校・現役学生への支援に注力した一年であった。物心ともに大きな支援をいただけたのは、本

学校友の温かい思いと母校愛の強さに尽きるが、それに加えて、日頃からの校友会活動による緊密な関係構築（顔の見える関係づくり）が無ければここまでの大きな支援には至らなかつたであろう。今後の早稲田大学の発展は、この65万人の校友との関係をいかに継続・発展させることができるかという点にかかっていると、言っても過言ではない。その点を踏まえた上で、2021年、校友会として、直近で取り組むべき課題としては2点あると考えている。

1点目は、長引くコロナ禍における従来型の対面中心での関係構築の工夫である。コロナ禍において予想以上に世代を超えてオンラインが一般化されたことに伴い、当初は多く見られた年配者によるオンラインへの抵抗感もかなり薄まりつつあり、校友会関係の会議や懇親会もZoomなどで行われることが多くなってきた。オンラインの長所として、イベント参加のための移動にかかる時間がほぼゼロとなり時間が節約できることや、初めての方でも気後れせずに気軽に参加しやすいこと、全国津々浦々・世界各地からも参加しやすいことなど多くの点があげられる。実際に、ニューヨーク稲門会が主催したオンラインによる海外稲門会交流イベントには、大学から総長・理事などの役

職者が出席するとともに、時差はあるものの世界各地から130人を超える多くの校友が同じ時間に参加し満足度も高かった。また、従来は同日に離れた場所で行われるイベントの場合、来賓となる総長や役職者は手分けをして各々に出張しなければならな



オンラインでのイベントも活発に開催

かったが、オンラインの場合、少しだけ時間をずらせば、複数の会に総長の出席が可能となり、多くの校友が直接総長の声を聞き、画面越しにコミュニケーションをとることも可能となった点はメリットとして大きい。もちろん、校友会活動の基本は対面で相手の体温を間近で感じながらの交流である点には変わりはないが、この対面での活動を大事にしつつ、時間や距離の制約を受けられないオンラインでの活動も同時に幅広く活用できれば、校友との関係構築もさらに幅が広がると期待している。

2点目は、早稲田ファンのさらなる拡充である。日頃から校友会活動に熱心に取り組んでくれている校友は早稲田応援団のコア層であり、校友会ではその層に対する関係強化を組織的に行っていることは前述のとおりであるが、実際はそうした熱狂的な校友は一部の層であり、特に若い働き盛りの現役世代は多忙でなかなか母校を顧みる余裕が無いのも実状である。校友会の会員数が現在約65万人であることを考えると、卒業後に何らかの校友会活動に参加したり、少額でも寄付をしたり、いずれかの形で少しでも母校に関わっている校友はまだ少なく、その点は継続的な課題である。ただ、今回のコロナ禍において、20代や30代といった若い校友や従来は校友会活動とは縁の無かった多くの校友からも緊急支援金への寄付の輪が広がったことを踏まえ、今後、校友会としては、コア層以外の一般層にも訴求する形で広報的な切り口を分けながら新たな早稲田ファン拡充を進めたいと考えている。具体的には、校友会費納入の有無に関わらず全校友宛に年に1回送付する情報誌「西北の風」を活用した大学の最新情報の提供、一般層向けの新募金(1万円募金キャンペーン)の創設、在学中から(学生の頃から)の校友会活動への参加

促進などである。さらに、本学には教育・研究のみならず、スポーツや文化・芸術などを通じて、校友以外にも多くの早稲田ファンが全国に存在することを踏まえ、そうした幅広い層にも訴求できる方策も検討・推進してまいりたい。

おわりに — 仰ぐは同じき理想の光 —

2021年となった現在も、新型コロナウイルス感染は拡大しており、油断のできない状況が続いているが、このような危機時だからこそ、校友会は母校と現役学生の力強い応援団でありたい。人生100歳時代となる中で、早稲田愛に満ちた校友の力が一層発揮でき、世の中に貢献できるよう、校友会としても組織的に活躍の場の提供や活動の支援を充実させていきたいと考えている。

『道が窮まったかのように他に道があるのは世の常である。時のある限り、人のある限り、道が窮まるという理由はないのである』。早稲田大学の創設者である大隈重信侯の言葉である。世界中が苦しい今だからこそ、あらためて大切に胸に刻みたい。

技術に堪能なる 士君子を育てる

―九州工業大学卒業生の
強い母校愛と同窓の絆―

永松 正博

九州工業大学名誉教授
明専会常務理事

1 九州工業大学と明専会

国立大学法人九州工業大学の前身は、1909（明治42）年、当時の実業家安川敬一郎が多額の私財を投じ、これも当時の教育界の第一人者山川健次郎が総裁として情熱を注ぎ、建学の理念である「技術に堪能なる士君子（技術だけでなく、人間力、中でも徳を併せ持った人材）」を養成すべく設立された明治専門学校である。一般社団法人明専会は、明治専門学校以来の卒業生がつくる、「母校支援と工業に関する学術、技術の振興を図り、もって学

術・文化の発展に寄与する（定款より一部改変）」ことを目的とする法人であり、その前身である明専学士会は、最初の卒業生が出て間もない1915（大正4）年に誕生している。明専学士会の会則には、冒頭に「本会ハ明治専門学校工學士ヲ以テ組織シ友情ヲ保チ親睦ヲ厚フシ相互ノ連絡ヲ計リ且ツ後進ノ誘掖ニ勉ムルヲ以テ目的トス」と書かれている（以降、明専学士会から現在の一般社団法人明専会までを「明専会」と書く）。

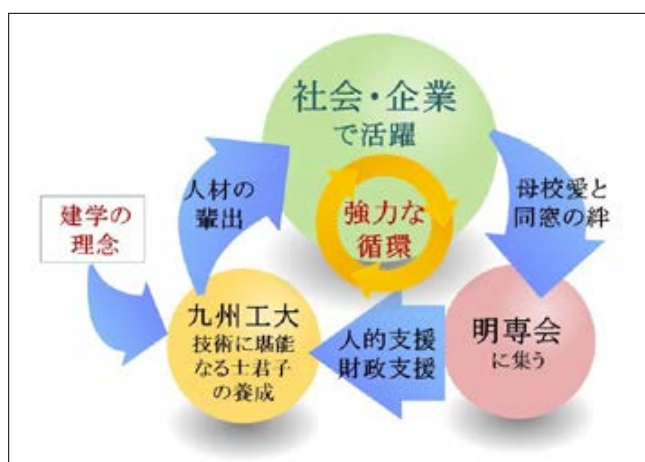
設立以来明専会は、その会則や定款に書かれているように、母校支援・学生支援を続けてきた。母校の二十五周年・五十周年・六十周年・七十五周年・九十周年・一〇〇周年の設立記念事業、**945**明専会の設立一〇〇周年事業、大学昇格期成会事業・情報工学部および生命体工学研究科新設期の支援などの母校の変革・新設期の支援、経済の恐慌時やこの度の新型コロナウイルス感染症で困窮する学生の支援、その他折々に多額の寄付事業を多数間髪を容れることなく行い、研究施設・研究設備・研修施設・学寮等の建築・整備、教員・学生のための奨学金制度、学生の学業の顕彰、人材育成支援を行ってきた。最近では、特に、大学の人材育成事業の支援（学生が主体的に学び考え行動する

Internal Commu

力を鍛える「明専会創造学習支援」、学生の海外派遣支援と学内の国際コミュニケーションセッション施設整備を行う「明専会グローバル人材育成支援」、および、学寮である明専寮の寮生を対象にした「明専寮語学・人間力育成支援」、および、明専会が大学と共催して行っている事業（「明専スクール」、「明専塾」、「明専女子塾」といった人材育成支援に力を入れている。九州工業大学の卒業生の母校愛と同窓の絆の強さは、右の「図1」のサイクルを、開学以来百十年以上絶やすことなく回してきたことにある。

2 明専塾と明専スクール

ここでは、「明専塾」と「明専スクール」について説明し



〔図1〕九州工業大学が開学以来回してきたサイクル

たい。まず明専塾であるが、これから卒業して社会・企業で活躍していく在学生に対して、第一線で活躍している卒業生が、社会・企業における仕事の内容、それに取り組む姿勢、企業戦略や最先端技術、および、学生時代に身に着けておくべきことを授けてくれる塾である。2008（平成20）年に第1回を開催し、2020（令和2）年2月までに189回開催している（それ以降は新型コロナウイルス感染症の影響により開催できずにいる）。日本のさまざまな業種（製造業が多い）の主立った企業の卒業生が、母校に足を運んでくれ、例えば第5回には三菱重工業株式会社の卒業生が「重工業から九州工大に期待する」、「九州工大の魅力とは・・・自己の経験を踏まえて」、および、「頑張れ！九工大生。MHI若手代表です」といった話をしてくれる。自分たちと同じキャンパスで学んだ、場合によっては同じ学寮や同じ研究室で過ごした先輩が、先輩ならではのリアルな苦労話や成功談・失敗談を交えて、プロジェクトの進め方や研究開発の話をしてくれるので、在学生にとつてこれ以上面白くて勉強になることはない。場合によっては、何カ月もインターンシップに行ったぐらいの気分になる。多いときは200名入るホールに立ち見が出るほ

ど、在学生が押しかける。この明専塾では、先輩から在学生への一方通行だけではなく、先輩と在学生がビュッフェ形式で簡単な食事をしながら交流できる場も設けている「写真1」。

ここでは、卒業生を囲んだ輪ができる。交流会には、しばしば、学長、副学長、学部長、明専学会長、副会長等が出席する。普通、学生にとっては、学長と話ができる機会などめったに無いが、明専塾の交流会では、それができる。学長にも「学生と話す機会が嬉しい」と言っていただけにいる。



[写真1]明専塾における交流会の様子

明専塾は、学年や学科を問わず全在学生が参加できる。一方、「明専スクール」は、すでに就職が内定した学生（各学科から合計40名程度を推薦してもらおう）に対して、就職後必要になる、企業とは何か、どのような働き方や

考え方が要求されるか、人間関係のつくり方、必要な技術（討論の方法・まとめ方、報告書の書き方）などを講義や実習で授けるスクールである。こちらは2011（平成23）年から開始し、2019（令和元）年まで、計9回開催されている（残念ながら昨年は新型コロナウイルスの影響で休止）。毎年、1日と1泊2日の計3日間、びっしりと組まれた日程で実施される。宿泊の前夜はアルコールの入った懇親会であるが、翌日は朝から、先輩から厳しい質問が飛ぶ発表会の準備と本番「写真2」があり、これも実社会に向けた良い経験となる。講師は、企業などに就職して間もない卒業生から要職にある卒業生まで、皆社会の第一線で活躍する卒



[写真2]明専スクールにおけるグループ討論の発表会の様子

業生である。また、企画も卒業生主体で行うが、大学の副学長やキャリア支援センター長なども加わる準備会議を毎年数回開催する。前回の反省をし（毎回参加者のアンケートをとる）、カリキュラムと講師、学生募集の方法、討論のテーマと指導方法などを、侃侃諤諤^{かんかんがくがく}の議論をして決定する。この明専スクールにも、必ず学長、明専会会長が出席し、学生へ激励の言葉をいただく。明専スクールの最終日に行うグループ討論の発表会や、修了式で各自が感想を述べる時には、わずか3日間のスクールであるが、参加学生の成長の様子を見て取ることができる。現在、2021年度の実施に向けて、またアフターコロナにおける実施方法も視野に入れて、オンライン会議システムも使った実施方法を検討中である。

3 強い母校愛と同窓の絆の源泉

明治専門学校設立にあたり、安川敬一郎は、校長、教授をはじめとして、生徒の全てを敷地内に寄宿させ、教室内だけでなく、朝夕に師弟の間を接近させ、あたかも全学が一つの家庭であるかの雰囲気をつくった。この学風は建

学の理念である「技術に堪能なる士君子」と共に、現在にも色濃く引き継がれている。教員は、学生の長い一生を考えて育て、そこで育った卒業生が社会や企業で活躍し、自分が育った母校と後輩に愛情を持ち続ける。そして、冒頭の図で示すように、明専会の下に集い、母校愛と同窓の絆をさらに深め、母校と学生に支援を行う。多くの支援の中でも特に、明専塾や明専スクールのような事業を継続して実施するには、大きなエネルギーを必要とする。本学の場合は、先述の「図1」に示すサイクルを、大学においても、卒業生においても、明専会においても、一丸となって力を揃えて、百十年以上回し続けることができていることにより、母校愛と同窓の絆を強く保つことができている。

【参考資料】

「建学の理念 技術に堪能なる士君子」編集委員会、「技術に堪能なる士君子」、一般社団法人明専会2014年(平成26年)第7版発行
 一般社団法人明専会編、「明専会100年の歩み」、一般社団法人明専会2015年(平成27年)発行

教育後援会 presents

コロナ禍を超克する

「繋がる」事業

―「大学と家庭の心のかげ橋」の実践―

宮田 慎一

関西大学教育後援会副幹事長
学校法人関西大学総務局付次長

1 コロナ禍のなかで「繋がる」ために

教育後援会(以下「本会」という)には、大学と同じように、会員(父母・保護者)の皆様から様々な声が届く。コロナ禍においても例外なくその声は届いた。会員の皆様からの切実な声をうけ、本会では、会務を執行する常任委員会の構成メンバーである、会長以下、常任委員の皆様と常任委員会を支える事務局とが一体となって動き出すことになった。

2 関西大学教育後援会とは

コロナ禍に対応した実際の事例は後述するとして、その前に、なぜ切実な声が本会にも届いて、そして会長以下、常任委員の皆様と事務局が一体となって事にあたることができたのかを理解いただくために、その歴史と活動の一端を紐解きながら紹介する。

本会は、終戦直後の劣悪な教育環境を背景に、その窮状を打開すべく、父母・保護者の有志によって全国の大学にさきがけ1947年に発足した組織である。『関西大学教育後援会創立十周年記念誌』には、当時の組織の特筆すべき点として「学校の教育方針に対して無理を申し出たり、たとえ善意であっても何等かの注文をつけると云う様な事はなく、学校が希望する処を助長するために、当会と学校とが相談の上、その諒解のもとに凡てを実行し、それによって学校の発展、子弟の向上、快適なる学問研究の環境を醸成する側面援助の外郭団体である」と云う点である」とある。紙幅の都合上、これまでの活動の紹介は割愛させていただくが、現在、全国において教育懇談会をはじめとする諸事業を展開しており、主にその諸事業を通じて会員の皆様から「生の声」が届くこととなる。

なお、会員の任期は子女在学中に限られるため「創立の精神」の継承ならびに「組織の継続性」などの観点から、「常任顧問（功労者）」、「名誉会長（前年度会長）」、「相談役（主に副会長、監事経験者）」及び「幹事長（事務局の責任者）」などの各役職を設けている。また、本会とは別に、関西大学の向上、発展に寄与することを目的とした、本会役員OB・OGを中心とする親睦団体、千寿会（1955年創立）も、大学の強力な支援団体として、本会と歩調を合わせた活動をしている。

このような背景があつて、常任委員会において「創立の精神」が確実に継承されてきたことが、会員の皆様の切なる思いと大学の方針を踏まえた学生生活に資する効果的な支援、換言すると、ステークホルダーを繋ぐ支援を可能にしている。

以降は、コロナ禍において実際に取り組んだ事例について紹介したい。

3 思い出に残る卒業記念写真画像の提供

2020年3月19日に予定していた学部卒業式の「式典」が、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から中止となつた。卒業証書・学位記の授与については、時間や場所の分散に

より実施をしたものの、卒業生や会員の皆様から「時節柄、仕方ないが、一生に一度のことなので大変残念である」などの声が多く寄せられた。なかには「社会情勢を踏まえることやむを得ないが、祖母から母、母から子へと受け継がれた着物を着る予定にしていたので正直寂しい」といった声なども聞かれた。

先述のような切なる声を受け、本会では、何かできることはないかと検討を重ね、卒業記念写真に代わるものとして、画像加工用の写真を用意し、本会HP上で公開した。卒業式の前撮りをして、データを保有している学生も多ことから、芝井敬司学長（役職は当時）との正門前でのツーショット写真などが簡単に加工できる素材を提供したのである。少しでも卒業式の雰囲気味わっていただきたいとの熱い思いと、芝井学長をはじめ大学の理解を得て企画の実現に繋がった。



卒業記念写真画像（加工用）の一例

4 大学が行う学生支援「学生の支援5本柱」への助成

池内啓三理事長、芝井敬司学長（役職はいずれも当時）の下、

経済上の理由から退学する学生を一人も出さないという強い思いを具現化した、大学が行う学生支援「学生の支援5本柱」(①インターネット環境整備への支援、②一人暮らしの学生への一律金の支給、③「関西大学家計急変者給付奨学金」制度の拡充、④「関西大学短期貸付金」の増額、⑤学費の納入期日の延長)事業の趣旨に賛同し、1億円を支援金として拠出した。

5 「大学教育の現状と就職に係る説明会」の実施

コロナ禍で中止となった学部別教育懇談会や地方教育懇談会を補い、就職説明懇談会の代替とする「大学教育(学部)の現状と就職に係る説明会」を、前田裕学長をはじめとする大学の協力を得てWeb配信(オンデマンド)で実施した。

6 会報『葦』新型コロナウイルス対策特別号の発刊

大学生活に関する不安を少しでも和らげるため、通常年3回発刊する会報『葦』の増刊号として『新型コロナウイルス対策特別号』を6月に臨時発刊し、会員の皆様(約28000人)のもとに郵送した。その主な内容は、「本会の取り組みの紹

介」、「大学の方針」及び「各学部の現状と取り組み」であり、原稿執筆にあたっては、池内啓三理事長、芝井敬司学長(役職はいずれも当時)ならびに13学部全ての学部長に協力いただいた。



会報『葦』新型コロナウイルス対策特別号

7 「100円朝食・100円夕食」への助成

本会では、学生に対する食育環境の充実を目的に、2018年から関西大学生生活協同組合の協力を得て「100円朝食」を実施してきた。今回の「100円夕食」の取り組みは、コロナ禍のなか、経済的に困窮する学生を支援するもので、千里山キャンパス(10学部)をはじめ、高槻キャンパス(総合情報学部)、高槻ミューズキャンパス(社会安全学部)及び堺キャンパス(人間健康学部)でも同様、もしくは類



千里山キャンパス「100円夕食」の一例



プレゼント配付内容(イメージ)

似の支援を行っており、今後、校友会(卒業生の団体)も、本会とともに本事業に対して支援する運びとなっている。

8 「〜コロナに負けるな!冬休みの学生応援企画 『帰省できずとも“安心”食パック』の実施

本企画は、「1000円夕食」に続く新たな「食」の支援であり、本学卒業生で本会元役員の方からの匿名による支援の申し出と物品の提供を契機として、常任委員有志、学校法人・大学の役職者有志及び教職員有志の賛同(寄附)を得て実現したものである。「コロナ禍で帰省できない」、「アルバイトができない」といった学生の声をうけ、越年に必要な食品をプレゼントとして500人分用意した。プレゼントを手にした学生の多くは喜びの

笑顔を見せていた。一方、年末年始の帰省を断念したという学生が、ふと寂しそうな表情を浮かべていたことも世相を反映しているようで印象深かった。

9 「新入生歓迎の集い」事業の開始から 「触れずにフレンズ」支援サイト開設へ

本会は、大学と共催で地方教育懇談会を1963年から開催しており、全国から様々な声が寄せられる。そこで寄せられた「友人がなかなかできない」という切実な声をうけ、本会の発案で、大学と校友会との共催行事として、関西大学生活協同組合の協力も得て「オール関大」の枠組みで、2018年4月から、一人暮らしを始める新入生を対象として「新入生歓迎の集い」(『大学時報第382号』においてその詳細を紹介)を開催している。しかし、今年度は、社会情勢に鑑み、その行事自体を中止にせざるを得なかった。

行事の中止に伴い、会員の皆様からは「空港で不安そうに旅立つわが子を涙ながらに見送ったが、慣れない土地で友達もつくれず、一人で暮らしているわが子を思うと切ない」といった声も寄せられた。株式会社ベネッセ「キャリアが実施したコロナ禍における新入生対象のアンケート調査(2020年4月17日)でも「生活費等の金銭面」や「学修」の項目を抑え「友だちづくり」への不安がトップという結果であった。

このような状況を憂慮した常任委員会の意を汲んだ事務

局では、川畑一成幹事長を中心に、5月下旬から急遽「新入生歓迎の集い」にかわる「新入生のための友達づくりを支援するWebシステム」の構築に力を注いだ。友達づくりは「待ったなし」との思いでスピードを最優先とし、何とか7月1日からの開設にこぎつけた。

同支援サイトは、全ての新入生を利用対象者とし「触れずにフレンズ」と名づけられた。新入生の個人情報をも不正アクセスから守るため、もともと全学生に付与される個人IDで、大学側が認証を行うので、学外からの勝手な「侵入」や「悪用」を阻止することができ、サポート役として、教職員数名や上位年次生も参加し、新入生からの相談にのるなど周囲からの見守りの配慮もした。

また、所謂「掲示板」形式で共通の趣味や関心を持つ人を探したり、所属学部、出身地などの属性に分かれて交流ができるようになっていた。課外活動団体のHPにリンクしている「KANDAI課外活動ナビ」へのアクセスや、「留学」、「ボランティア活動」に関する情報が得られる学内サイトへのアクセスも容易である。同支援サイトは、開設から1週間で、新入生約7000人のうち約2000人がログインし、新入生の関心の高さがうかがえた。なお、サイト自体の使い勝手につい

ては、先述のとおり、スピードを重視して開発したことから、今後、少しずつ改良を加えていくことで、さらに良いものとなり得ると思料している。

ところで、支援サイトの開設から、ひと月あまりが経過した8月上旬には、大学で、秋学期授業を原則として対面授業とする基本方針が決定された。(様々な事情から対面授業が難しい学生・教職員には、申請に基づきオンデマンド等の配慮)。その結果、秋学期には9割に近い授業科目が対面で実施された。さらに11月には来年度授業についても原則対面の基本方針が決定された。こういった状況を踏まえながら、



「触れずにフレンズ」トップページ

現在、本会内では、支援サイトの改良について検討を重ねているところである。

10 ウイズコロナ・アフターコロナ 「繋がる」新たなステージへ

2020年には、コロナ禍のみならず「令和2年7月豪雨」も発災した。本会では、コロナ禍に係る支援だけではなく、常任委員の皆様によるご厚意(寄附)によって災害救助法適用地域にお住まいの全ての会員の皆様に対し、ミネラルウォーター『自然の秀丽』(関西大学と月桂冠株式会社による産学連携共同開発商品、会員一世帯につき500ml・24本入り1ケース)を届けた。

これら本会の諸活動を通じて「学生の笑顔」を見ることは、何より嬉しいことであり、事務局の励みにもなっている。「学生の笑顔」は「会員の笑顔」に繋がる。そして「学生の笑顔」と「会員の笑顔」は帰属意識の醸成にも繋がる。また、「学生の笑顔」の要因に話題性があれば、報道で取り上げられ、報道されれば大学のプレゼンス向上に繋がる。大学のプレゼンス向上は、一巡して「学生の笑顔」と「会員の笑顔」に繋

がる。このような好循環をも意識しながら、ウィズコロナ・アフターコロナの新しいステージを考えていきたい。

11 むすびにかえて

本会の活動が、戦後から今日に至るまで、充実・発展してきた理由は、「創立の精神」を尊び、「不易」と「流行」を客観的に見極めながら、柔軟に歩んできたことに他ならない。先にも触れた『関西大学教育後援會創立十周年記念誌』の「むすび」では、本会の活動を、大学に対する「愛の発露」と表現している。まさに、会長以下、常任委員の皆様は、「わが子の母校はわが母校」を合言葉に、日々この言葉を体現するかのような活動をされている。その崇高な精神と姿勢には心から感謝する次第である。また、本会の活動を理解し、支援いただいている委員(支部役員)の皆様、会員の皆様にも、諸行事などで大いに協力いただいている。会報編集顧問の先生方(主に各学部から選出)や広報アドバイザーの知見も日頃から重要な参考としている。幹事長以下、事務局は、このような皆様に支えられ事にあたっている。本当に有難いことであり、ここに心から御礼申し上げたい。

「食支援」が紡ぎ出す コミュニケーション

―大学構成員の意識変化と社会との連携創出―

龍谷大学学生支援特別推進室

深尾 昌峰・岡田 雄介

杉山 聖子・西坂 正雄

1 経緯と体制の確立

COVID-19の感染拡大、政府による緊急事態宣言発出の影響により、龍谷大学においても年度当初から対面による活動を全面的に制限し、授業はすべてオンラインで実施するとともに、大学への入構も制限する中で、学生は不自由な学生生活や学修を強いられることになった。多くの大学同様、家庭の経済的な問題やPC・ネット環境を中心とした学修面にかかる問題がたちまち露呈し、対応に追われた。また、緊急事態宣言が出され、アルバイトの機会を奪わ

れた学生たちも多数存在した。一人暮らしの学生たちは生活費の多くをアルバイトで賄っているため、生活していくことができないような深刻な状況も見られた。

こうした事態を受けて、本学ではまず4月末に教職協働型で活動する「学生応援方策検討ワーキンググループ」(7名)を設置し、学生の実態を把握するために、全学生を対象としたアンケート調査を実施した。2020年4月24日～5月1日までの1週間にポータルサイトを通じて「緊急】新型コロナウイルスの蔓延に伴う学生生活への影響調査」を、大学院や短大、留学生別科を含めた全在学生2万377名を対象に実施し、このうち4475名(約22%)から回答を得た。この結果、「経済的な問題」の他にも、心やコミュニケーションの問題、一人暮らしの学生を中心とした食生活の問題など、複合的で多様な問題を認識させられることになった。

こうした学生の生活実態を受けて、学生支援の取り組みを総合的かつ全学横断的に実施するために、5月1日付で学生支援担当の学長補佐を1名選任した。その後、予算措置と円滑な事務局運営を図るべく、5月中旬に「学生支援特別推進室」を設置して、腰を据えた学生支援の取り組みを行った。

2 学生調査から見た学生の姿

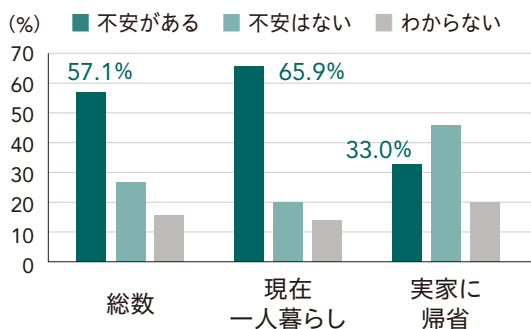
4月末に実施した緊急アンケート調査の結果、回答者4475名のうち、現在も一人暮らしをしている学生（※留学生を含む、以下、同様の扱いとする）が1525名（全体の34%）、一人暮らしだがコロナ禍の状況を踏まえて実家に帰省した学生が558名（同12.5%）、合計2083名（同46.5%）の学生が平常時は一人暮らしをしていることがわかった。全国に緊急事態宣言が発出されて、県境を跨いでの移動が著しく制限されている状況にあつて、ゴールデンウィークの長期休暇を控え、下宿先にとどまる一人暮らしの学生や留学生たちが食生活に大きな不安を抱えていることがわかったことから、学生たちの「いのち」を繋ぐことが最優先課題であると認識し、まずは食支援を先行して取り組むこととした。一人暮らしの学生たちに「今後の食生活に対する不安」を調査すると、現在も一人暮らしをしている学生のうち65.9%の学生が不安を覚えていた。〔図表1〕

また、平常時は一人暮らしをする学生2083名に対して、生計の実態を聞くと、親の仕送りに加えてアルバイトや奨学金で生計を立てている学生が計823名（39.5%）、アルバイトしなければ生計が成り立たない学生が計601名

（28.9%）おり、これらを合計すると1424名（68.4%）もの学生が、「アルバイトあつての生計」であることがわかった。しかし、そのアルバイトの多くが休止あるいは解雇された状況にあつて、将来に不安を大きく募らせていた。

具体的には、現在も一人暮らしをしている学生1525名にCOVID-19の生計面への影響を調査すると、「今は貯金があるが将来が不安だ（751名・49.2%）」、「アルバイトができないため全く生計が立たず困窮している（273名・17.9%）」との回答があり、合計1024名、67.1%もの学生が日々の生計に不安を抱えていることがわかった。

こうした状況にあつて、現在は実家に帰省している学生も含めた平常時は一人暮らしをする学生2083名に「もし、食材の提供支援サービス（安価で有償）があれば利用したいと思いますか？」と問うと、合計で1368名（65.7%）の学生が利用したい旨の回答をした。さらに、



〔図表1〕学生アンケート調査の結果
今後の食生活に対する認識 (N=2,083)

現在も一人暮らしをする学生1525名に対象を絞ると1132名(74.2%)の学生が利用したい旨の回答を行い、その実態は切実かつ緊迫した状況にあることが明らかになった。

3 学生食支援の取り組みへ

(1) 全体のスキーム

緊急事態宣言の発出によって、義務教育課程の初等中等教育学校が休校措置に入り、食材のフードロス発生が懸念されるとともに、飲食店の多くが休業を余儀なくされており、そこに供給予定であった食材も全国的に余っている状況があった。こうした社会の情勢を踏まえ、学生が必要とする食材を確保し、これを学生に提供するスキームを確立することとした。また、本学の連携協定自治体や、農学部のリソースも活用して、食生活支援の充実を図った。

取り組みの財源としては「新型コロナウイルス対応 学生支援募金」を活用することとし、結果として、教職員・卒業生・保護者を中心とする多額の寄付金によってこの取り組みは支えられた。

(2) 取り組み期間と利用実態

食支援は令和2年5月2日(土)からスタートし、前期の定期試験が終了する8月4日(火)までの14週間にわたって取り組まれた。食材の提供は週2回の配布(1回目のみ、提供がGW中であったことから、週1回7日分を配布)とし、火曜日と金曜日に配布を始めたが、5月下旬から部分的に実験・実習科目の対面授業が再開されたことに伴い、瀬田キャンパスにおける食材提供の場所が瀬田駅前の本学バスロータリーであったことで、授業運営に支障をきたすことが分かった。このため、後半の金曜日の配布を土曜日に変更し、以後、火曜日と土曜日の配布とした。

食材配布スタッフは、当初、教職員のボランティアによって対応した。本学には3つのキャンパスがあり、規模に合わせてスタッフ配置を行い、3キャンパス合計22〜28名程度で配布スタッフを配置し、支援開始当初から5月26日(火)までの期間は教職員のボランティアスタッフを学内公募する中で食材配布を行った。その後6月の配布回からは、学生への経済支援を目的として、食材配布スタッフを対象となる学生を大学が雇用するスチューデント・ジョブを採用し、最終回の8月4日(火)まで10週18回にわたって運用した。

5月2日(土)から開始した学生への食支援は、8月4日

(火)までに、3キャンパス合計25回、延べ5926名の学生に対して、計5万2406食分の食材を供給した。

この間の最大ピークは5月19日(火)であった。1回あたりの供給力限界500名分を大幅に超える申込数があったことから、抽選漏れとなった学生に個別に連絡を行い、週2回配布の後半分へ優先的に受入を行った。しかし、それでも週当たり1000名分の供給量をさらに数百名分ほど超過する申込があったことから、お米、インスタント食品、レトルト食品などの生鮮食料品を除く食材で構成する「エマージェンシーキット」を300名分用意し、追加で配布することとなった。結果として5月19日(火)は一連の食支援において最大数となる計687名分もの食材を供給した。

(3) 食材配布の段階的な展開

一人暮らしの学生たちの生計事情は、当初の切迫した状況から社会情勢が変化するとともにその厳しさも緩和していった。そうした情勢変化に合わせて、食支援活動も全体で4段階の支援を行った。第1段階(STEP1)は学生の「いのち」を繋ぐ目的で、すべての食材を無償で提供した。一時は1週あたり1200名超の申込に対処した。

続いて、第2段階(STEP2)の支援として、緊急事態宣

言の解除に合わせて食材配布を有償化するとともに、食材供給に関しフードロスや社会貢献活動に積極的な学外企業と連携、加えて食材配布の対象となる学生を直接雇用して生活支援を行うスチューデント・ジョブ制度も合わせて導入した。

その後、入構制限(行動指針)の緩和に合わせて食支援活動も第3段階(STEP3)へ移行し、昼食分の食材を生協食堂の利用に代替し、これらを併用することとなった。また、全体的に社会情勢が明るくなってきたことや、コロナ禍も一服した感があつたことから、食材支援を受けてきた学生たちが、ご縁のある方へ気持ちを伝えるコミュニケーション支援の方策として、食材配布に合わせて、教職員提供の汚損ハガキなどを再利用して提供する「ことば」が紡ぐまごころPJを展開した。ここでは、スマートフォンやインターネットが充実した時代だからこそ、ハガキを使い、手書きで気持ちを伝える取り組みを行った。

食支援の最終段階(STEP4)として、地域飲食店と連携した活動に取り組んだ。これは短期大学部社会福祉学科の実習とコラボレーションを図り、短期大学部の学生がキャンパス界隈の飲食店をセレクトし、その飲食店との話し合いの結果、協力いただくことに同意をいただいた飲食店の利用に大学が補助をするものである。1回250円

相当の「地域飲食店利用クーポン」を一人あたり2枚発行、学生がこれを利用して飲食店で食事を行い、各飲食店は当該分を大学に請求する、というスキームである。このことで、地域に根差した大学として、地域の飲食店の活性化や地域経済に貢献する一方で、地域とともに学生を支える地域協働スキームとするものであった。

(4) 学外の諸団体・企業などとの連携

本学の学生支援に対する取り組みに共感する学外の企業・団体20社以上から、食材などの寄付や協力の申し出が多数寄せられた。その一例を示すと、「Peach Aviation 株式会社」様からは、コロナ禍によって国内外で移動制限が課せられ利用客の激減とそれに伴う減便によって発生した機内食用の冷凍食品を、廃棄することで生じるフードロスへの対策も兼ねて700食分、本学に無償提供いただいた。「大阪王将」を経営する「株式会社イートアンドホールディングス」様からもCSRや社会貢献の観点から冷凍食品多数の提供を、「コカ・コーラボトラーズジャパン株式会社」様からは東京オリンピックのプロモーション用に用意していた飲料を提供いただき、それぞれ学生に配付した。また、地元企業である「フランス屋製菓株式会社」様や「橋爪食品株式会社」様、「株式会社青木光悦堂」様からも加工食品や

菓子などを提供いただいた。加えて、自治体など団体では、「滋賀県東近江市(万葉の郷ぬかつか)」様、「京丹後市」三重・森本里力再生協議会」様、「京都生活協同組合」様などから食材・生活用品などを提供いただいた。また、本学で食堂を展開する「龍谷大学生生活協同組合」様、「カフェ&」を展開する「丸善雄松堂」様からも、それぞれ生協食堂の利用優遇や安価でクッキーの提供をいただくなど、まごころ溢れる支援を頂戴した。

さらに、個人からの寄付も相次いだ。本学大学院修了生で現自治体職員からは、計7回にわたり京北町の取れたて野菜を提供いただいた。他にも、学内施設管理に従事するスタッフや本学学生からの支援も寄せられた。

(5) スチューデント・ジョブとしての雇用

学生食支援の食材配付準備・作業は、緊急事態宣言下の「STEP1」では、教職員有志によるボランティアで行った。緊急事態宣言が解除されたあとの6月からは、「STEP2」として、依然としてアルバイトが十分にできない学生を、食材配付の準備や当日配付作業を担う「スチューデント・ジョブ」として雇用した。

本取り組みでは、アルバイトの賃金を、業務終了後に「日払い」で学生に渡すことで、学生の経済支援に繋がった。「ス

	[取り組み内容]	[背景・補足]
支援の過程	STEP1 ▼ 緊急食支援	
	5/2(土)～緊急事態宣言の発出中 ●一人暮らしの学生・留学生へ5日分の食材を提供 ●すべて無償で提供 ●可能な限り生鮮食料品を提供	●非常に切迫した状況があった ●学生の「いのち」を繋ぐことが目的に ●利用者は1週あたり1,200人超の水準
	STEP2 ▼ 自立支援	
	緊急事態宣言の解除後 ●学外企業と連携した支援(大阪王将など) ●当初予定どおり有償化による支援へ ●対象学生の雇用(スチューデント・ジョブ)	●@1,000円で提供(有償提供の開始) ●学生には日払いで給与を支給し、経済生活をサポート ●支援の輪が学外に拡大 ●利用者は1週あたり400人程度に減少
STEP3 ▼ 総合支援		
入構制限の緩和・日常生活の復活 ●STEP2の支援を継続 ●昼食は生協食堂利用に変更(瀬田は選択制) ●「ことば」が紡ぐまごころPJ(教職員提供の汚損ハガキなどを再利用して、学生からご縁のある方へ気持ちを伝える)	●切迫感が大きく緩和した状況に ●利用学生がいる限りは、最後まで食支援を継続した ●大学生協と連携することで、学生の栄養面のバランスに配慮	
STEP4 ▼ 地域連携支援 / 地域経済の活性化		
「アフターコロナ」の時代に向けて ●STEP3の支援を継続 ●地域の飲食店と連携した食支援・地域経済の活性化 ●短期大学部の実習と連携する	●予想通り8月上旬に食支援を終了 ●地域飲食店と連携した活性化の取り組みは8月末まで継続した ●最終的に学生街の形成や地域社会と協働した大学づくりをめざした	

[図表2] 学生食支援の段階的ステップ

「スチューデント・ジョブ」は、入構時の体温チェックや手洗い・アルコール消毒の徹底、作業時にはマスク・ビニール手袋を着用するなど、入構制限下の学内で新型コロナウイルス感染予防、感染拡大防止を徹底した。

一方で、入学式が中止となり、キャンパスに来る機会がなかった新入生にとって、「スチューデント・ジョブ」を機に、同級生や先輩学生との交流が生まれたことは、副次的効果であった。スチューデント・ジョブは、6月1日(月)から8月4日(火)までの期間で、延べ580名が業務に従事した。[図表2]

4 まとめ

コロナ禍という未曾有の事態に、多くの大学が悩み苦しんでいる。本稿では龍谷大学における学生支援、特に食支援の様子に関して述べてきたが、今回のテーマとの関係でいくつかの発見があった。まず、非常事態の中で反射的に「学生のため」であれば多くの教職員が機動的な動きを見せたこと。いわば災害下において、機会が適切にデザインされていけば、こういった動きに関わり合いを持ちたい教職員が多数いることを改めて再確認させられた。これらのプロセスが、結果として構成員の誇りや帰属意識を高めていくことになるのではないか。加えて、学生を雇用する「スチューデント・ジョブ」も、学生を受け手から担い手に変化させる契機となった。学内の業務をどんどんアウトソーシングしていく流れは、経営効率の部分では妥当かもしれないが、総合的な教育機関として創出するアウトカムやミッションとの関係でみると、必ずしも「合理的」でない。学生を含めた構成員が多様な形で運営や事業に関わることで、多層的なオーナーシップが形成される。危機事象でこのような実感をもてたことは本学として大きな財産となると考える。



大学と「つながる」 人と「つながる」

―TWCU SSSプロジェクト
学生の活躍で活気あるキャンパスを目指す―

安藤 由紀美

学校法人東京女子大学事務局長

はじめに

「つながる」は、東京女子大学のさまざまな取り組みに際してよく用いられることばである。

初代学長の新渡戸稲造は、自身の大学入試の際に、面接官に「太平洋のかけ橋になりたい」と大志を述べたという。日本と諸外国とを「つなぐ橋」、異なる文化のかけ橋になりたいという思いは、後の国際連盟事務次長に「つながる」。また、新渡戸はリベラル・アーツ教育を進めていく中で、教員と学生、学生同士の「つながり」をとて

大切にした。

本学の特徴的な入試である「知のかけはし入試」も、本学で学びたいという意欲をもった受験生、知の好奇心を充足させる学びの場である大学とを「つなぐ」入試である。さらにこの入試は、篤志家による全面的な奨学金サポートへと「つながって」いる。

また、2018年の本学創立100周年では、「挑戦する知性」を基本コンセプトに据えた。現在でも本学を目指す高校生などに対し、「『挑戦する知性』―未来につなぐリベラル・アーツ」ということばをオープンキャンパスなどで掲げている。何かを「つなぐ」こと、誰かと「つながる」ことの大切さを、コロナ禍において改めて再認識した。

1 「SSSプロジェクト」始動

開校後の全学集会で新渡戸稲造学長は、「やはりこの学校の精神、キリストの精神を示すものがないと思う。たとえば犠牲と奉仕ということほど、この精神を代表するものはない。また、みなさんの全生涯を通じてこの精神ほど大切なものはないと思う。英語では、Service and

Sacrificeだ。(中略)また、SSはローマ字で精神と身体、思索と仕事にも通じる。」と、述べている。それ以来、本学はこのSSマークを校章としている。

2020年は、コロナ禍により学生はアルバイト収入が激減し、学生生活に影響することが懸念された。前期のすべての授業は遠隔方式となり、学生はキャンパスに入構できない状況が続いた。大学は、このような中で、できる限りアルバイトの機会を提供し、経済的支援を行うこととした。理事会は臨時予算を承認し、学長の指揮により、危機管理担当副学長がプロジェクト統括者としてニーズを把握、学生委員長協力のもと学内周知を行い、学生生活課が実効性のあるプロジェクトとして推進していった。SSプロジェクトと名付けられたこの活動を、「学生が大学とつながる」、「学生と学生がつながる」「誰かのためにできる」ことを行う、全学的な取り組みとして位置づけた。

2 「SSプロジェクト」の活動内容

代表的な活動は、遠隔授業に対するオンライン学生サ

ポートである。前述のとおり2020年前期の授業は、すべて遠隔授業となり、本学では約7割がオンラインによる双方向型授業として行われた。このオンライン授業には、担当教員の希望に応じてSSプロジェクトによる学生サポーターが参加し活躍した。PC操作のアドバイスをしたり、ネット環境に関する質問に答えたり、Zoomによる入退室の補助などを行い、円滑な授業運営に資する活動として好評を得た。

10月17・18日に開催された1年生のための「キャンパス開放日」においても、上級生サポーターが活躍してくれた。4月以降一度もキャンパスに入構できていない1年生のため、上級生サポーターは、教員とともに専攻紹介、キャンパス案内などを行った。この日は久しぶりに、活気に満ちた空気がキャンパスに流れ、教員、上級生、1年生が同じ空間で、同じときを過ごす良い機会となった。「写真1・2」

SSプロジェクトの活動は、全学レベル、学科・専攻レベルなどさまざまであるが、その一部を紹介する。

・オンラインでの上級生による新入生への学習相談

nication

- ・ 高校生との「多文化共生」ワークショップに係る活動
 - ・ キャリア・センター(就職支援担当部署)での就職活動を終えた4年生の就職活動報告に係る業務
 - ・ 所属する専攻のホームページリニューアル作業
 - ・ Webオープンキャンパスサイトに掲載する動画の作成
 - ・ 女性学・ジェンダー研究に興味・関心をもつ学生視点からのおすすめ図書紹介(女性学研究所のホームページに掲載中)
 - ・ 図書館利用の促進のための「図書館とつながろう!」活動支援
 - ・ 女性のエンパワーを支援するエンパワーメント・センターのワークショップのポスター作り「写真3」
- いずれも大学組織や教職員と学生を「つなぐ」活動、上級生と下級生を「つなぐ」活動である。学生は、それぞれの能力や技能を生かして、学内のさまざまな部署で自身のできる活動を積極的に行ってくれた。何かの、誰かの役に立てて良かった、活動を通して自分の大学をより深く知ることができた、との声が聞かれ、学生の成長をうかがうことができる取り組みとして評価して良いだろう。

東京女子大学
主催：エフパワーメット・セクター

女性対象

オンライン講座&ワークショップ
カラーで惹き出すあなたの魅力

11月7日(土) 14:00~16:00

講師
ながま かがす
中間 貴恵
合同会社STERAUM代表
イラストレーター/セミナー講師

定員:16名 (定員に達し次第、締め切らせていただきます。)
参加費:2000円
参加方法:ZOOMによるオンライン受講
※お申し込みいただいた方に後日、参加用URL、ID、パスワードをお送りいたします。
【準備するもの】
・事前にZOOMアプリをインストールしてください。
・マイク、カメラ機能付きパソコン、タブレット、スマートフォンでご参加ください。
・Wi-Fiなどネット通信環境をご確認ください。
【お問い合わせ】
東京女子大学エフパワーメット・セクター
E-Mail:empowerment@lab.twcu.ac.jp Tel 03-5382-6832

お申し込み受付後、当センターよりメールをお送りいたします。
参加費ご入金確認後、参加用URL、ID、パスワードをお伝えします。

申込はこちら! / QRコード

[写真3]エンパワーメント・センターのイベントに関するポスターを国際社会学科経済学専攻の4年次学生が作成。学内外に配布



[写真1]図書館
上級生が1年生に、図書館利用と蔵書について説明



[写真2]本館前(VERA広場)
上級生が1年生に、本学の歴史ある建物について説明

Internal Commu

おわりに

このSSプロジェクトは、コロナ禍においてもICTの活用により大学と学生、学生同士の新たな形のコミュニケーションを実現することができた。新型コロナウイルスは、2021年度も終息は見えない状況であるが、感染拡大、クラスターの発生を防ぎつつ、大学は少しずつ活動を広げていかななくてはならない。

このSSプロジェクトは、理事会、教職員、学生の協力のもと実現した。2021年度もさらなる学生の活躍の場を確保し、学生の生活を守るとともにコロナ禍においても活気あるキャンパスを実現する一つの手立てとして、このプロジェクトをさらに拡大していきたいと考えている。